

場面緘黙当事者・経験者の困難な行動場面での心理的特徴

—高社交不安者、低社交不安者との比較—

田 中 佑里恵

本研究は、場面緘黙当事者、場面緘黙経験者、高社交不安者、低社交不安者の4群を対象として4行動場面の場面想定法を行い、心理状態と個人特性の比較および心理状態に影響を与える要因の検討を目的とした。ウェブ調査にて、STAI、受動的自動思考尺度、本来感尺度、対人恐怖心性尺度、SFNE、SMQ-R・SMQ-J等を用いた。SFNEとSMQの群間差は一部のみにも関わらず、場面緘黙当事者および経験者は、高社交不安者と低社交不安者に対し、多くの場面の多くの心理状態に有意差が認められ問題が高かった。また、一部場面での当事者と経験者の共通する特徴および、当事者に見られる特徴があった。SFNEとSMQを統制すると、当事者および経験者と、高社交不安者では、一部の心理状態に正負の異なる影響があった。場面緘黙当事者は経験者より問題が高いが、当事者と経験者には連続する特徴があり、高社交不安者とは異なる状態と考えられる。

趣味、パーソナリティ特性と主観的幸福感の関係

青 石 結太郎

本研究は、趣味の種類や数とパーソナリティ特性、主観的幸福感の関連を検討した。予備調査後、本調査を実施し、趣味の自由回答、趣味項目、パーソナリティ尺度、主観的幸福感尺度へ回答を求め、大学生50名のデータを用いた。身体的・ゲーム・受動的メディア・対人的・アウトドアの分類毎に趣味の有無で群に分け t 検定を行った結果、パーソナリティ特性に差は見られなかった。自己報告数、項目選択数と幸福感に相関は見られなかったが、分類該当数と幸福感、自己報告数と開放性、項目選択数と外向性・開放性の間に正、項目選択数と情緒不安定性の間に負の相関が見られた。自己報告数または項目選択数と分類該当数の交互作用はいずれも幸福感を予測しなかった。本研究の結果、多様な趣味を持つ人ほど幸福感が高く、趣味の自己報告数が多い人ほど開放性が高く、また趣味項目を多く選択する人ほど外向性、開放性が高く、情緒不安定性が低いことが示された。

大学生における家族および友人からの被受容感とアサーション行動の関連

朝 倉 唯 衣

本研究の目的は、大学生における、家族からの被受容感および友人からの被受容感とアサーション行動の関連について検討することであった。分析対象者は、大学生150名であった。調査では、被受容感を得る対象を家族または友人と指定し、対象別に測定した。重回帰分析の結果、円滑な対人関係を形成するうえで必要とされるアサーション行動は、いずれの被受容感とも正の関連を有し、説得や交渉が求められるような葛藤場面におけるアサーション行動は、家族からの被受容感のみと正の関連を有していた。また、パス解析の結果、家族からの被受容感が友人からの被受容感を媒介して、関係形成のために必要とされるアサーション行動と正の関連を有していた。家族から心理的に自立するとされる大学生においても、家族関係で得る被受容感はアサーション行動を促すとともに、友人関係で得る被受容感を介して、一部のアサーション行動に影響を及ぼす可能性が示唆された。

呼称から見る青年期における親子関係が自尊心に与える影響

伊 東 秀 晃

本研究の目的は青年期における親子関係が子どもの自尊心に与える影響を検討することであった。青年期は自尊心の発達時期であり、安定した発達を行うために自尊心の規定因に着目する意義があり、自尊心の変化の規定因として養育態度がある。子どもが親の養育態度をどう受け止めるかは、親子関係に基づいている。子どもが親をどのように呼ぶかは、子どもと親がどのようにお互いの関係を共有しているかを示している。呼称は親子関係の指標となることから、子どもから親に対しての呼称に着目した。親を親族呼称で呼ぶ子どもと非親族呼称で呼ぶ子どもの自尊心を比較した。質問紙を用いて、青年期の男女183名を対象に調査を実施した。男性群、女性群、全体群に分けそれぞれで分散分析を行った結果、どの群においても有意な差は得ることができなかった。このことから、呼称が直接的に子どもの自尊心に影響を与えていることは示唆できなかった。

大学生における過剰適応傾向と進路選択場面における認知された親子間コミュニケーションの関連について

岡 本 愛

進路選択では、重要な他者の視点と自分の視点の相互調整が重要だとされているが、過剰適応青年の進路選択行動に関する先行研究では、親との相互調整の視点が欠けている。本研究ではその点を含めた調査をすることを目的とし、質問紙による調査を行った。結果として、過剰適応傾向は進路選択時の青年から父親・母親へのコミュニケーションにおける議論の回避、結合性、議論による立場の明確化へ影響を与え、父親からの青年へのコミュニケーションにおける独自性、結合性の認知に影響を与えることを明らかにした。さらに、影響の有無には性差があった。また、過剰適応傾向の外的側面と内的側面の高さの組み合わせによる類型を用いた検定では両方の得点が高い過剰適応群よりも、内的側面の得点のみが高い群のほうが父親への議論の回避の得点が高く、外的側面は進路選択におけるコミュニケーションでは適応的に働く可能性が示唆された。

特性論と行動論を踏まえた、大学生が感じるサーバントリーダーシップ

岡 本 将

本研究では、サーバントリーダーシップに着目し、特性論的アプローチと行動論的アプローチとの比較を通してGreenleafの提唱するサーバントリーダーのあり方を明らかにすることを目的に、大学生を対象としたアンケート調査を行った。また、リーダーの性別と年代がメンバーのリーダーシップ認知に与える影響についても検討した。質問紙調査を実施し、相関分析とウェルチ検定を行った結果、サーバントリーダーシップは、行動論的アプローチの観点からPM理論のpM型リーダーに近い特徴が見られ、特性論的アプローチの観点からメンバーに対して仕事の圧力が少ないながらも本人は仕事と向き合い、対人関係を特に重視したリーダーであることが示唆された。また、リーダーの性別はリーダーシップ認知には影響がなかったが、調査対象の大学生と年代の近いリーダーはサーバントリーダーシップの特徴が高く認知される傾向にあった。最後に、本研究の問題点と限界についてまとめた。

大学生の友人関係における役割期待と本来感が精神的健康に及ぼす影響

尾崎 沙恵子

本研究では、周囲の他者から役割の実行が要求される現象である役割期待、自尊感情の適応的側面であり自分自身に感じる中核的な本当らしさの感覚の程度と定義される本来感、健康の重要な一要素である精神的健康の3つの概念の関連に着目することで、友人関係における自己の振る舞いや、自己価値の感覚という視点から、健康促進のアプローチを考察することを目的とした。大学生を対象にWeb上での質問紙調査を行った。分析対象126名のデータをもとに階層的重回帰分析を行ったところ、本来感のみが精神的健康を予測した。一方で、役割期待遂行度と、役割期待遂行度と本来感の交互作用は精神的健康を予測しなかった。以上の結果から本研究では、大学生の精神的健康を考えるうえで、本来感に着目する有用性が示唆された。

羞恥の情動伝染が規範逸脱行動に与える影響について

—集団成員性に着目して—

加藤 千尋

現在社会問題となっている迷惑行為は、社会規範から逸脱した規範逸脱行動と呼ぶことができる。規範逸脱行動を抑制する感情として羞恥感情があり、羞恥感情は行為者のみに限らず、羞恥行為の観察者にも生じる。また、羞恥感情は行為者と観察者の関係性の違いによって、喚起される感情量に変化があると示されている。本研究では、規範逸脱行動の行為者から観察者に羞恥感情が情動伝染することで、逸脱行動の予防行動がみられるか検討した。さらに、行為者と観察者の集団成員性が異なることで、観察者に喚起される羞恥感情の量に違いがあるのか検討した。実験室実験を行った結果、逸脱行動の予防行動はごく少数しか観測されず、情動伝染が起きたのは参加者の3割程度であった。2要因分散分析の結果、群間差はみられず仮説は支持されなかった。他の感情が羞恥感情に与える影響を調べる為重回帰分析を行った結果、心理的ストレス反応による影響が有意であった。

大学生アスリートにおけるスポーツ競技反芻が心理的競技能力に及ぼす影響

鴨下 夏歩

本研究では大学生アスリートにおけるスポーツに関する反芻が心理的競技に関するスキルにどのように影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。また同時に、スポーツ競技反芻と心理的競技能力の関係に団体種目、個人種目といった区分で競技種目がどのような影響をもたらすかについても明らかにした。運動部の部活動に所属している18から24歳の大学生アスリートを対象に、オンライン上での質問紙調査を行った。分析対象122名のデータをもとに従属変数に心理的競技能力の5つの下位因子と総合得点、説明変数に競技種目とスポーツ競技反芻を設定した階層的重回帰分析をおこなったところ、先行研究とは異なり「精神の安定・集中」と総合得点のみに対してスポーツ競技反芻は有意な影響を及ぼした。また本研究では、競技種目とスポーツ競技反芻の交互作用を検討し、競技種目がスポーツ競技反芻と心理的競技能力に影響する可能性が示唆された。

大学生における学生相談への援助要請意図 —学生相談利用のメリット、自己スティグマとの関連—

河本 莉緒

本研究の目的は、学生相談への援助要請意図と学生相談利用のメリットの評価、自己スティグマとの関連について検討することであった。大学生163名を対象に質問紙調査を実施した。自己スティグマにおいて男性が女性よりも得点が高いという性差が見られたため、男女別に分析を行った。相関分析、階層的重回帰分析の結果から、男女いずれにおいても先行研究と一致して学生相談利用のメリットの評価が高いほど援助要請意図が高い傾向がみられ、援助要請意図を促進するうえでメリットを高めるような介入が有効であることが示唆された。一方で、援助要請意図と自己スティグマについて、男女いずれにおいても相関はほぼみられなかった。また、学生相談利用のメリットと自己スティグマの交互作用項は有意でなく、調整効果は見られなかった。援助要請意図と自己スティグマとの関連については、他の変数も考慮するなど詳細な検討が必要であると考えられる。

大学生におけるテストの失敗に対する友人からの慰めによって生じる受け手の感情 —自尊感情の高低と友人への欲求による違い—

金 泰ウ

本研究の目的は、テストの不合格場面において、友人からの慰めによって生じる感情を、自尊感情の高低および友人への欲求に着目して検討を行うことであった。本研究では、2つの仮説を検討した。仮説1では、慰めの効果の感情場面について、自尊感情が高い人は低い人に比べて、感謝が高く、自責および反発が低いことを検証した。仮説2では、友人関係における欲求について、自尊感情が高い人は低い人に比べて、相互尊重欲求および心理的サポートが高いことを検証した。大学生を対象に場面想定法を用いた質問紙調査を実施し、74名を本研究の分析対象とした。分析の結果、仮説1は支持されなかった。また、仮説2については、自尊感情が低い人は高い人に比べて心理的サポートが統計的に有意に高く、仮説とは逆の結果が得られた。今後は、他の年代を対象とした研究や、他の場면을想定した研究などを用いて、より詳細な検討を行うことが求められる。

大学生における過去のストレス体験に対するソーシャルサポートと外傷後成長との関連

坂本 綾香

現代社会では、人は様々なストレスを抱える。ストレス体験は心身の健康などに悪影響を及ぼす一方、後に外傷後成長というポジティブな変化をもたらすこともあるとされる。外傷後成長を促す重要な要因のひとつとしてソーシャルサポートがあげられるが、過去のストレス体験からの外傷後成長に現在のソーシャルサポートが及ぼす影響を調べた先行研究は少ない。本研究では、小中学生時のストレス体験からの外傷後成長と過去・現在のソーシャルサポートとの関連を明らかにするため、大学生を対象にアンケート調査を行った。結果から、外傷後成長と最も強く関連する要因はソーシャルサポートではなく当時受けたストレスの大きさであるということ、現在のソーシャルサポートの中では「情報・道具的サポート」が最も外傷後成長に寄与すること、小中学生時に体験したストレスの内容としてあげられたものには人間関係におけるストレスが最も多いことが明らかになった。

組織内の潜在的攻撃行動の生起構造の検討

—攻撃対象との上下関係及び心理的距離の潜在的攻撃行動の生起頻度に及ぼす影響—

杉浦早紀

攻撃的な意図を隠そうとする攻撃の一形態である潜在的攻撃の研究は、海外で盛んに行われてきた。潜在的攻撃行動の多くは組織の中で起こるとされているが、その生起構造については十分な検討がなされていない。そこで、本研究では部活動・サークル内における潜在的攻撃行動の生起構造を検討することを目的として、大学生を対象に質問紙実験を行った。その結果、仮説に設定した上下関係の主効果および組織コミットメントの交互作用効果は認められず、また心理的距離が近いと潜在的攻撃行動が高くなるという仮説に反し、心理的距離が遠いと潜在的攻撃行動が高くなる傾向が見られた。さらに、心理的距離と尊敬感情の交互作用効果が有意傾向にあることが認められ、心理的距離の効果は尊敬感情が高いことによって強められる可能性が示された。これらの結果から、組織内における潜在的攻撃行動に影響を与える因子に関するさらなる研究の必要性が示唆された。

大学生における友人関係の変化とその関係要因

関 根 人

本研究は、新型コロナウイルスの流行前後における大学生の友人関係の志向性について比較を行う事で、大学生の友人関係の志向性の変化およびその変化に対して新型コロナウイルスが及ぼした影響について考察することを目的とした。調査では、友人関係志向性尺度等5つの尺度への回答を求め、大学生94名のデータを用いた。友人関係志向性尺度、共有様式尺度について【2020年3月頃】と【2023年度11月現在】との間でt検定を実施した結果、“関係の共有”“気持ちの共有”等の下位尺度に有意差がみられた。また、重回帰分析の結果、満足度尺度得点と機会群尺度得点、および機会群尺度得点と反意群尺度得点との間に有意な関係がみられた。その結果、大学生は相互理解に基づく深い友人関係を志向し、交流の機会を希求する傾向がみられるとともに、交流の機会の損失と自分の時間の確保という点で新型コロナウイルスは人間関係に影響を与えた事が分かった。

小学生における家族イメージと心身症傾向の関連

高井良 真子

小学生における家族イメージと心身症傾向の関連を明らかにするため、家族イメージ法（FIT）と心身症傾向の質問紙を、97名の小学生に実施した。FITの結びつきの強さ、パワーイメージと心身症傾向の相関を算出した。また心身症傾向を平均値で群分けした高群・低群と、FITの占有率、心理的距離、位置関係、パワーバランス、世代間境界、向き、家族型でカイ二乗検定／フィッシャーの直接検定法を行った。同様の分析を心身症傾向の上位25%と下位25%を境界とする3群で行った。

結果、小学生の高い心身症傾向と、遠い母子距離および母親の心の向きが自己に向いていないことに関連があった。また母親がヨコの関係で父親より優位で、母子接近型であることも、心身症傾向の高さと関連していた。反対に、父子接近型で、父親が母親の上ではなく、ヨコの関係でリードしていくことが、子どもの心身症傾向の低さと関連していた。加えて特に心身症傾向の高かった2名のFITを事例検討した。

音楽聴取による「懐かしさ」、時間的連続性および主観的幸福感の関連

高木真結

音楽聴取によって喚起される「懐かしさ」には、音楽そのものの持つ感情価である低次レベルの懐かしさと、自伝的記憶の想起を伴う高次レベルの懐かしさがある。本稿では低次および高次の懐かしさが主観的幸福感に与える影響について分析した。さらに、自分の過去と現在がつながっているという実感を表す時間的連続性の認知が高い個人は、高次の懐かしさを感じやすいと仮定し、調査した。先行研究でも示されている通り、懐かしさは主観的幸福感をわずかに増幅させた。さらに、音楽聴取による懐かしさ感情のうち「親しみ」因子が主観的幸福感に影響を及ぼすことが明らかになった。高次レベルの懐かしさを感じた参加者のうち、音楽聴取による「親しみ」因子得点が高い参加者は主観的幸福感が高くなるという示唆が得られた。時間的連続性については「親しみ」因子にわずかな影響がみとめられたが、今後尺度の見直しやさらなる研究が必要である。

中学生における「居場所がない」という感覚に影響する要因に関する研究

—自己関係づけと学級風土に着目して—

田中彩恵

本研究の目的は、中学生における「居場所がない」感覚に影響を与える要因を検討することであった。対他的疎外感と自己疎外感の2つの因子で構成された「居場所がない」感覚尺度を用い、他者のなんでもないしぐさを自己に被害的に関連づける傾向である自己関係づけ、学級の心理社会的・個別的性質である学級風土と、「居場所がない」感覚との関連を検討した。中学生184名を対象に自己関係づけ、学級風土、「居場所がない」感覚を測定した。その結果、自己関係づけと学級風土はそれぞれ「居場所がない」感覚の下位因子である対他的疎外感、自己疎外感の両方に影響を及ぼしていることが分かった。さらに、自己関係づけは自己疎外感へ与える影響が大きく、学級風土は対他的疎外感へ与える影響が大きくなっていった。これらのことから、自己関係づけと学級風土は「居場所がない」感覚に影響を与えており、それぞれ別の因子に大きく影響していることが示唆された。

音嫌悪症傾向に共感性と規範意識が与える影響

谷口さくら

本研究の目的は、ある特定の生活音に対して怒りや嫌悪といった感情が喚起され、過剰で不適切な反応を表出してしまう症状である「音嫌悪症」傾向を助長、抑制する心理的な要因として、「認知的共感」と「情動的共感」という多次元的な共感性、「公共規範要求」と「配慮規範要求」から成る規範意識の関連を検討することであった。大学生115名のデータについて重回帰分析を行った結果、共感性の主効果は認められなかった一方で、規範意識の下位因子である公共規範要求と配慮規範要求の主効果、配慮規範要求と認知的共感の交互作用項の効果が有意であった。下位検定の結果、認知的共感と配慮規範要求の交互作用効果が認められた。本研究において、強迫的側面の強い規範意識と音嫌悪症傾向の関連が明らかとなったため、今後さらに強迫性に注目した検討を進めていくことで、未だ確立されていない音嫌悪症の治療に心理療法を適用できる可能性が示された。

Awe感情と幸福感の関連

津田 丞太郎

本研究の目的は、Awe（畏怖・畏敬の感情）と幸福感との関連について、Aweのポジティブな側面とネガティブな側面から捉え、幸福感を人生全般にわたるポジティブな心理的機能（PWB）として捉えて明らかにすることであった。日本の成人200名を対象として、Awe尺度と心理的ウェルビーイング尺度（PWBS）からなるオンラインアンケート調査を実施した。結果から、Awe感情全体とPWBSの人格的成長因子の間に有意な正の相関、Aweのポジティブな側面とPWBS全体、並びにPWBSの人格的成長因子、自己受容因子、積極的他者関係因子の間に有意な正の相関、またAweのネガティブな側面とPWBSの自律性因子、人生の目的因子の間に有意な負の相関が認められた。本研究から、Aweのネガティブな側面によって、Awe感情を経験しても一様に幸福感を得やすくなるわけではないということ、Aweのポジティブな側面から得やすい幸福感とAweのネガティブな側面から得にくい幸福感は同じではないことが示唆された。

パーソナリティ特性、音楽に求める心理的機能とアーティスト嗜好の関連

土田 綾子

本研究は、Big Fiveのパーソナリティ特性がアーティスト嗜好に与える影響、および音楽に求める様々な心理的機能がその影響を媒介する可能性を検討した。大学生237名のオンライン調査データを用いた。重回帰分析の結果、複数の組み合わせでパーソナリティ特性が特定のジャンルのアーティスト嗜好と心理的機能に影響を与え、心理的機能がアーティスト嗜好へ影響を与えることが示された。媒介分析の結果、開放性の低さは感情調節機能を介して女性アイドル嗜好に、外向性の高さはコミュニケーション機能を介してロック／パンク嗜好と韓流／K-POP嗜好に、さらに身体性機能を介して韓流／K-POP嗜好に影響を与えていることが示された。アーティスト嗜好を探索的因子分析に基づき分類し直した上で分析した結果、新たに開放性の高さが慰め機能を介して坂道グループ嗜好につながっていることが示された。

ジェンダー・ステレオタイプによるステレオタイプ脅威の軽減方法の検討

常山 小百合

本研究ではジェンダー・ステレオタイプによるステレオタイプ脅威を軽減する方法として、ステレオタイプ脅威についての知見を与えることを検討した。独立変数に参加者間要因として実験条件（3水準）と参加者内要因として実験前後の変化（2水準）を、従属変数には意欲、パフォーマンス、不安の3つの変数を測定した。その結果、意欲の主効果のみが有意であった。また、性差に関するステレオタイプ脅威と性差検討の教示と不安帰属の条件（実験4）については、他の実験条件と比較して意欲とパフォーマンスは最も高くなり、不安については最も低くなった。しかし、意欲の主効果以外有意ではなかったことから、不安帰属によるステレオタイプ脅威の影響の軽減を支持することはできなかった。また、どの実験群においても意欲が実験後の方が高まったことや、性別による不安を感じたという人が少なかったことから、ステレオタイプ脅威の影響は小さいことが示唆された。

大学生におけるアイデンティティ発達と親からの期待に対する反応様式との関連

中 川 由 理

本研究の目的は大学生におけるアイデンティティ発達と親からの期待に対する反応様式との関連を検討することであった。大学生145名を分析対象として重回帰分析を行った結果、「自分の生き方の尊重」から「広い探求」「深い探求」「コミットメント形成」「コミットメントとの同一化」のそれぞれに対する正の効果と「反芻的探求」に対する負の効果、「親の期待への表面的な迎合」から「広い探求」に対する正の効果、「親の期待の軽視」から「コミットメント形成」に対する正の効果のみ有意であり、その他の反応様式からアイデンティティ発達の諸側面への効果は有意ではなかった。これらの結果より、親からの期待に一方的に影響を受けることなく、自分の意思や考えに基づいて自分の生き方を尊重することが、青年のアイデンティティ発達プロセスにおいて、自らのアイデンティティに関する重要な選択の決定を支える可能性が示唆された。

自己効力感と課題の重要度の認知が先延ばしのパターンに及ぼす影響について

中 村 海 渡

本研究の目的は、大学生を対象に課題固有の特性や個人の状態に着目し、課題の重要度の認知や課題固有の自己効力感が先延ばし行動の3つのパターン（「計画的プロセス」、「否定感情プロセス」、「楽観的プロセス」）にどのように影響するかについて検討することであった。大学生159名を対象に過去に取り組んだ課題を想起してもらい、その課題に対する重要度の認知、自己効力感、取り組みの状況について回答を求めた。共分散構造分析によるパス解析で自己効力感、課題の重要度の認知が先延ばし過程における意識に及ぼす影響を行ったところ、自己効力感が先延ばし前の課題の辛さを抑制し、否定感情プロセスによる先延ばしを抑制する可能性が示唆された。課題の重要度認知が先延ばしの意識に及ぼす影響に関しては、本研究では有意な結果は得られなかった。

自閉スペクトラム症傾向の高い大学生の孤独感について

—回避行動との関連から—

長 澤 悠 花

ASD傾向者は、生活上の不応として高い孤独感を経験しやすいことが明らかである。また、ASD傾向者は社会場面におけるコミュニケーションの苦手さを有することや過去の社会場面における失敗の記憶が残りやすいことから、他者の拒絶や社会的場面での失敗を避けるために、回避行動をとりやすい傾向があると推測される。そのような回避行動により社会的関係は形成、維持できなくなるため、孤独感が生じるのではないかと考えられる。

そこで、本研究は、ASD傾向の高い青年の孤独感の特徴を、回避行動との関連から調べることを目的として、大学生198人に質問紙調査を行った。その結果、回避行動と孤独感の関連はASD傾向者のみにみられること、ASD傾向と孤独感の関連には回避行動が部分的に媒介していることが明らかとなった。さらに、回避行動について、実際に回避行動をとらなくても、認知的に回避行動をとることによっても孤独感が生じる可能性が示唆された。

利他行動と評価者数との関連

—評価懸念に着目した検討—

原 田 瑞 穂

ある他者に利他行動をすると別の他者から自身の利益が返報される間接互惠性では、利他行動を行った行為者はポジティブに評価されると考えられてきた。しかし実際には、利他行動の行為者がネガティブに評価される場合もある。そこで本研究では、他者からの評価に対する注意深さである評価懸念に着目し、参加者の利他行動を評価し得る人(評価者)の数が、評価懸念や利他行動、間接的利益の期待に与える影響について検討した。その結果、評価者の数が少ない場合では、評価懸念が利他行動を促進させる一方で、評価者が増加した場合では、評価懸念が利他行動を抑制させることが明らかになった。このことは、参加者が評価者の数の増加によって、自身の利他行動がネガティブに評価されることを懸念したと考えられる。本研究で得られた知見から、人々は他者の選ばれ方に関する情報から他者のイメージを形成する可能性が示唆された。

母親の自己開示と娘の自己開示の適切性の関連

藤 井 月 菜

本研究の目的は、社会的学習理論の観点から、母親の自己開示の適切性と青年期の娘の自己開示の適切性の関連を明らかにすることであった。18歳から29歳の女性を対象にアンケート調査を実施し、養護的な養育態度のもとでは母親の自己開示の適切性が高いと娘の自己開示の適切性も高い(仮説1)、過保護的な養育態度のもとでは母親の自己開示の不適切性が高いと娘の自己開示の不適切性も高い(仮説2)という2つの仮説の検証を行った。その結果、どちらの仮説も支持されず、母親の養育態度が養護的でないほど、母親の自己開示の適切性が高いと娘の自己開示の適切性も高いこと、母親の養育態度にかかわらず、母親の自己開示の不適切性が高いと娘の自己開示の不適切性が高いことが示された。仮説は支持されなかったものの、本研究の結果から、母親の養育態度と母親の自己開示の適切性の組み合わせが、娘の自己開示の適切性の発達にとって重要であることが示唆された。

男性における身体的自己概念、配偶価値と配偶者防衛方略の関連

ホワイト ジャスティン 海

本研究は、男性の身体的自己概念、配偶価値と配偶者防衛方略の関連について検討した。オンライン調査により身体的自己概念および配偶価値の尺度、和訳したTaxonomy of Tactics and Acts of Mate Retentionの一部の尺度への回答を求め、最終的に男性36名のデータを分析対象とした。身体的自己概念は配偶者防衛方略の異性間操作(直接防衛、負の誘導、正の誘導)、同性間操作(所有の公的アピール、負の誘導)のいずれとも相関しなかった。一方、配偶価値は同性間操作と弱い負の相関を示した。交際経験のある人(N = 23)に限定した場合、身体的自己概念は同性間操作と中程度の正の相関を示し、異性間操作とも統計的に有意ではないものの弱い正の相関を示した。一方、配偶価値はいずれとも相関しなかった。この結果から、交際経験のある男性においては、身体的自己概念が強いほど配偶者防衛方略のうち同性間操作の頻度が高いことを明らかになった。

親からの自立および精神的自立が 援助要請行動および主観的幸福感に与える影響についての検討

正 城 海 瑠

本研究では、大学生を対象に、親からの自立および精神的自立と援助要請行動、主観的幸福感との関連を検討した。親からの自立尺度は親への依存と親への服従の2つの下位尺度からなり、精神的自立尺度は協調性、主体的自己、判断・責任性の3つの下位尺度からなる。分析の結果、親からの自立の低さは援助要請行動過剰型と正の関連を示した。親からの自立と援助要請行動回避型は有意な関連は見られなかったが、親への依存の低さと援助要請行動回避型は正の関連を示した。精神的自立の低さは援助要請行動過剰型と正の、精神的自立の高さは精神的自立と負の関連を示した。また、個人内の親からの自立と精神的自立の程度の不一致により主観的幸福感が低くなるという仮説を検討したが、予測した交互作用は示されず、精神的自立の主効果のみ示された。精神的に自立している程度が高いほど主観的幸福感が高いことが示された。

SNS利用頻度・利用態度が与える幸福感への影響

—社会的比較志向性の観点から—

三 谷 篤 生

若者のSNS利用時間や利用態度と社会的比較の関連の中で、SNSの長時間利用や受動的による社会的比較量の変化という側面に対しての知見は少ない。また現代の日本におけるSNSでの社会的比較が幸福感に及ぼす影響についても知見が一貫していない。そこで本研究ではSNSの利用時間や利用態度が社会的比較量の変化とそれを介した幸福感への影響について検討した。質問紙を作成し、大学生121名を対象にSNS利用状況（SNSの利用頻度とSNSの利用態度）、社会的比較、協調的幸福感、SNSストレスをWeb調査した。分散分析の結果、SNS利用状況と社会的比較・協調的幸福感の関連については有意な結果が得られなかったが、SNSの重要度評価とSNSストレスについては重要度が低いほどSNSストレスも低下していた。また、社会的比較志向性とSNSストレスについて、社会的比較志向性が低いほどSNSストレスは低下していた。しかし、SNS利用状況と社会的比較について交互作用は観測されなかった。

中学生の保護者への愛着と登校回避感情の関連

—学校におけるポジティブ・ネガティブな出来事の経験も踏まえて—

森 優 海

本研究の目的は、中学生の保護者への愛着と登校回避感情の関連について、学校におけるポジティブ・ネガティブな出来事の経験も踏まえて検討することであった。中学生を対象にオンラインの質問紙調査を行った。相関分析の結果、保護者への不安定な愛着および部活動を除く学校におけるネガティブな出来事の経験は登校回避感情と正の相関を、学校におけるポジティブな出来事の経験は登校回避感情と負の相関を示した。階層的重回帰分析の結果、愛着不安および学業・授業の主効果、愛着回避と友人との余暇的かわりの交互作用、愛着回避と恋愛の交互作用が確認された。単純傾斜分析から、友人との余暇的かわりの経験が多い場合に愛着回避が登校回避感情をより高め、恋愛の経験が多い場合に愛着回避と登校回避感情の正の関連がみられなくなることが確認された。保護者への愛着と登校回避感情の関連における、ポジティブな出来事の経験の調整効果が示された。

Web会議システムにおける多元的無知の生起に関する研究 —時間規範に関する行動の検討—

森 下 瑚 音

新型コロナウイルスの感染拡大で、Web会議システムが多くの大学や企業で導入された。Web会議システムはCMCに分類されるが、文章を利用するCMCと比較してFTFと類似した現象が確認される場合も多い。本実験では、Web会議システムを用いた大学の講義状況で、延長した講義から退出する行動に関する規範である「時間規範」について、認知と行動の2側面から多元的無知が生じることを検証した。その結果、延長した講義から退出する行動について、自分自身について回答した「あなた」と比較して、他者を推測した「同じ講義を受ける学生」の規範を低く見積もる傾向が確認された。また、独立変数に時間規範の主体、及び、各群と退出行動を組み合わせた退出行動、従属変数に時間規範得点を取った2要因分散分析を行った結果、いずれにおいても有意な差は確認されなかった。他者の規範意識を低く見積もる誤認知では、自身の規範に沿った行動が促進されることが示唆された。

オンライン調査における望ましくない回答行動の抑制 —ポジティブな抑制手法についての検討—

山 田 怜 生

オンライン調査の欠点として、Careless Responding（以下CR）が生じるという点が複数の研究で指摘されている。CRの抑制手法について検討した先行研究の多くは、警告や監視などネガティブな感情を喚起させることでCRの抑制を試みるものが多い。しかし、研究倫理上の観点から、ポジティブな抑制手法についても検討する必要がある。オンライン調査では、相手の存在感に対するリアリティを感じにくく、調査実施者が機械的非人間化されるため、CRのような無責任な回答行動が生じている可能性がある。そのため本研究では、調査実施者のあたたかみを向上させるキャラクターを用いることで、機械的非人間化を解消し、CRを抑制することができるか検討した。しかしながら、使用したキャラクターは、調査実施者のあたたかみを向上させることができず、CR抑制効果も見られなかった。今後は、本研究で得られたCR者のデータをもとに、有効な抑制手法について多角的に検討していく必要がある。

大学生の感情発言抑制行動の意識内容と精神的健康の関連

山 村 萌 衣

本研究では、大学生の精神的健康に影響をもたらす社会的スキルの発揮場面として、感情発言抑制行動に着目した。本研究の目的を、大学生の感情発言抑制行動の意識内容と精神的健康の関連を調べることとして質問紙調査を行った。その結果、感情発言抑制行動の意識内容には性差があることが示された。よって性差を考慮し、パス解析による多母集団同時分析及び媒介分析を行ったところ、男性では明確化の困難さ・否定的な他者反応の予防が精神的健康に負の影響を、自己保護・話題の社会的価値の低さが正の影響をもたらしていた。女性では意識化の回避が精神的健康への負の影響を、話題の社会的価値の低さが正の影響をもたらし、明確化の困難さが会話不満感を媒介して精神的健康への負の影響をもたらしていた。よって大学生の感情発言抑制行動においてその意識内容が、精神的健康へ影響をもたらす、抑制行動自体の適切性・不適切性を規定することが明らかになった。

スポーツ場面の対人関係において生理的覚醒が親密度に与える影響の検討

川 島 千 明

生理的覚醒は自己開示の増加を引き起こし、他者への自己開示 (self-disclosure) は親密度に関係することが先行研究より示された。本研究では、I群(実験1: Personal Spaceの侵害, 実験2: 運動)とII群(実験1: Personal Spaceの侵害, 実験2: Social Space)に分けて両群で異なる実験を行った。尚、使用した尺度の問題点から生理的覚醒から親密度までの「影響」を検討することは不可能であった。分析の結果、Personal Spaceの侵害のみでは生理的覚醒を引き起こされず運動によって生理的覚醒を引き起こされた。また生理的覚醒の有無と自己開示、親密度の高さに関係しないと推察できる。しかし自己開示と親密度の関連についてI群にのみ5%水準の有意差が見られたことから自己開示と親密度の関連には生理的覚醒が関係すると推察出来る。本研究の検討課題として、サンプルサイズの小ささ、使用する尺度や実験計画の見直しが挙げられる。

大学生における自発的特性推論

—表情に基づく検討—

程 略

他者の行動を観察したとき、その人のパーソナリティ特性を無自覚的、無意図的に推論することがある。この潜在的過程における特性推論は、自発的特性推論と呼ばれる。先行研究では、ニュートラル表情写真と行動記述文を呈示した際に、行動情報からどのように自発的特性推論が生じるかが検討されてきた。しかし、人は、行動だけでなく表情からも他者の内的特性に関する情報の読み取りを行う。本研究では、自発的特性推論の生起プロセスに表情がどのようにかわるのかを明らかにするため、日本人成人82名を対象に再学習パラダイムの用いた実験を実施した。喜び表情写真またはニュートラル表情写真を呈示し、表情と行動記述文の組み合わせによる自発的特性推論の違いについて検討を行った結果、表情にかかわらず自発的特性推論が生起することが示された。ここから、成人は、表情よりも、行動によって呈示された情報を優先して特性推論を行う可能性が示唆された。

養育者の養育態度が大学生の規範意識に与える影響

福 重 利 佳

規範意識とは、社会において多くの人が共有する価値基準と、そのためにとられる行動様式である規範が内面化されたものと定義される。これまで、規範意識の欠如が非行や犯罪といった不適応を起こす可能性が指摘されてきた。さらに規範意識の予測因子として、養育態度および愛着が挙げられた。これらが同一視を経て、規範意識を形成すると考えられた。そこで本研究は、養育態度、愛着、同一視や態度が規範意識にどう寄与するのか、明らかにすることを目的とした。調査の結果、養護 (care) の高さと同保護 (overprotection) の低さが、安定した愛着の形成に重要なことがわかった。重回帰モデルからは、安定的な愛着が形成され、養育者への親密さといった要因を介すことで、順守規範意識が高まる可能性が示唆された。しかし、モデルによる規範意識への寄与は大きくなく、愛着以外の、養育者への同一視や態度および規範意識に共通する要素が、規範意識の予測因子となる可能性が想定された。